

映像ソフトに観る《アルジェのイタリア女》 水谷 彰良

註：『レコード芸術』（音楽之友社）2010年10月号の拙稿『DVD 発クラシック名作劇場 22 ロッシーニ：歌劇《アルジェのイタリア女》』の改訂版です。 (2012年10月、日本ロッシーニ協会 HP に掲載)

《アルジェのイタリア女》——イスラム世界とキリスト教圏の交差と差異

題名に含まれる「アルジェ」と「イタリア女」、そこに示されるイスラム世界とキリスト教圏の交差と文化の差異が、ロッシーニ《アルジェのイタリア女》の面白さの鍵である。こうした題材のオペラは「イスラム物」もしくは「トルコ物」と称され、モーツァルト《後宮からの誘拐》(1782年)がそうであるように、オスマン帝国の宮廷に捕らわれの身となったヨーロッパ人が脱出するプロセスを描く。先例に、主人公と文化圏に違いはあるもののグルック《思いがけないめぐり合い、またはメッカの巡礼》(1764年)があり、ラモアの《優雅なインドの国々》(1735年)においても海賊に誘拐されてトルコに連れて来られたフランス女性エミリを主人公に、王子オスマンの求愛と恋人との再会が描かれる(第1幕)。

この題材の利点は、ヨーロッパ人にとって奇異なイスラム文化の風習や生活様式を劇中で示し、バンダ・トゥルカ(トルコ軍楽風の楽器群)を用いてエキゾチックな音楽を盛り込める点にある。ロッシーニの《アルジェのイタリア女》もその一つで、台本はアンジェロ・アネリがルイージ・モスカのために書いた同題の台本を下敷きにしている(1808年ミラノのスカラ座初演。全曲録音はBongiovanniが発売)。従来の文献は原作を『ソリーマン2世の美しい女奴隷ロクセラーナ』の物語としたが、ロッシーニ全集の校訂者アツィオ・コルギは1805年にアントニエッタ・フラポリなるミラノ女性が海賊に拉致され、アルジェの太守ムスタファ=イブン=イブラヒムの宮廷へ連れ去られた事件に着想を得た可能性を示唆する。事実ならアップ・トゥ・デートな話題をオペラ化したことになる。構成の変更とテキストの追加は、不詳の台本作家が行った。



《アルジェのイタリア女》初期版タイトル頁
(パリ、シュレザンジェ社、筆者所蔵)

全2幕からなる物語は——妻エルヴィーラに飽きた太守ムスタファが、イタリア女を後釜に据えようと思いつく。そこに海賊の捕虜となった美しいイタリア女イザベッラが連れて来られる。恋人リンドーロを探しに船出して捕らわれた彼女は、太守の宮殿で彼に再会すると、女の色気と機転で難局を切り抜けようとする。そして「女に囲まれ、寝て、食べて、呑む」結社パッパターチの入会儀式をでっちあげ、ムスタファに「見ても見ない、聴いても聴かない、食べるだけ食べ、他人のことはほおって置く」との誓いを守らせ、その間にイタリア人捕虜を連れて船でアルジェを脱出する——というものである。

初演は1813年5月22日、ヴェネツィアのサン・ベネデット劇場で行われ、熱狂的成功を収めた。ロッシーニはレチタティーヴォ・セッコ、リンドーロのカヴァティーナ(第9曲)とアリのアリア(第13曲)の作曲を不詳の協力者に委ね、自分は序曲と主要ナンバーを作曲したが、異常な熱意と靈感を得て取り組んだことは、書き下ろしの序曲、第1幕イザベッラのカヴァティーナ、二重唱、フィナーレ、第2幕の五重唱、三重唱「パッパターチ」、イザベッラのロンドの高い完成度が証明する。女の色気と媚態の表現、喜劇的コンセプトの巧みな音楽化、アンサンブルにおけるエネルギーの噴出も見事だ。第1幕フィナーレでは全員が錯乱状態に陥り、「ディン、ディン」「タク、タク」「クラ、クラ」「ブム、ブム」と、鐘の音、金槌の音、カラスの鳴き声、大砲の音を擬音で歌う。この部分は原作台本に無く、ロッシーニの求めて追加されたと思われるが、その奇想天外な着想は音楽のシュルレアリスムの先取りと言えよう。スタンダードは、「強烈きわまる印象を受けるのだから傑作である」「誰もかも腹をかかえて笑いころげながら叫んだ。〈すごい！完璧だ！〉」と書いた『ロッシーニ伝』山辺雅彦訳、みすず書房、60頁)。《アルジェのイタリア女》とはまさにそうした作品であり、ロッシーニの天才と狂気がまぜこぜになって誕生したオペラなのである。

ベルカント復興前の映像と上演(①と②)

さて、映像ソフトを時代順に取り上げてみよう。別記のように《アルジェのイタリア女》の映像ソフトは映画版も含めて六つある(下記。2011年3月現在。DVDは収録年代順に番号を付して掲げ、歌手は、イザベッラ、リンドーロ、ムスタファ、タッデーオの順に掲載)。

最初は、半世紀以上も前の 1957 年に RAI (イタリア放送協会) が制作したテレビ映画である (①)。これはモノクロ映像、2 時間弱の短縮版で、音楽も別録音の口パクだが、なんとイザベッラを 22 歳のテレサ・ベルガンサが歌い演じている。これだけでもお宝映像といえるが、往年の名歌手セスト・ブルスカンティーニのタッデーオに加え、リンドーロ役アルヴィーニオ・ミシャノの瑞々しいテノーレ・リリコ・レッジェーロの歌声を聴けるのも嬉しい。

とはいえ、舞台は呆れるほどいい加減なスタジオ・セットである (マリオ・ランフランキ演出)。オーソドックスな演出かと思いきや、囚われのイタリア男たちが料理人となってピッツァを作り、イザベッラとリンドーロがプロペラ付きの箱で宙に去るなど結構キッチュ。歌の旋律の繰り返しに装飾変奏を適用せず、所作や演技も古風だが、それはそれで 20 世紀半ばの演奏法や演技の見本といえる。その一方、声の選択と歌唱が意外に的確であることにも驚かされる。

DVD① マリオ・ランフランキ(演出) ニーノ・サンツオーニョ指揮ミラノ・イタリア放送協会管弦楽団&合唱団
テレサ・ベルガンサ(Ms) アルヴィーニオ・ミシャノ(T) マリオ・ペトリ(B) セスト・ブルスカンティーニ
(Br)他 (収録:1957年ミラノ[テレビ放送用、音は別録音])Hardy(海外盤)



上演映像の最初は、1986 年 1 月のメトロポリタン歌劇場ライブである (②)。ジャン=ピエール・ボネル [ボンネル] の演出は 1973 年 11 月がブルミエで、これがマリリン・ホーン of the メトロポリタン歌劇場におけるイザベッラ初役となった。幕が開くと一見写実的な作りの宮殿が見える。だが、宦官たちはお面の被り物と着ぐるみで、背景画も含めてほどよくデフォルメされている。色彩は淡く、味わいがあり、リンドーロの登場シーンでは照明の変化が目覚ましい効果を挙げる。

すでにロッシェニ財団の全集版が成立しているのでエディション上の問題はないが、歌手と歌唱が旧弊で、ベルカントの様式に反することは、リンドーロ役ダグラス・アルステッドの叫ぶ発声一つとっても明らか。不正確なアジリタの用法、歌手に合わせたテンポの弛緩など、今日のロッシェニ演奏の基準からすれば時代遅れで忍耐を強いられる。でも、それらはすべて無視しよう。なぜなら最大の見どころ聴きどころは、収録時 52 歳のマリリン・ホーンにあるからである。見た目はイタリア女ならぬアメリカン・ガールでも、幅広い音域を柔軟かつアクロバティックに駆け回る歌唱法はロッシェニ歌唱の最前線を行くものだ。「イタリア統一万歳」の横断幕を前に、決然と歌われる「祖国のことを考えよ」の素晴らしさも特筆に価する。よってこの上演の最大の価値は、ホーンの見事な演唱と適度なデフォルメを施したボネルの演出に尽きる。「パッパターチ」ではチーズをスパゲッティにすりおろしたホーンが試食し、「アルデンテ！」と言って爆笑を誘う。パオロ・モンタルソロのムスタファも見どころだが、第 1 幕フィナーレのアンサンブルの出を間違えるようでは褒められない。ジェイムズ・レヴァインの指揮は大味で、イタリア的でなく、ホーン以外の歌手に歌の変奏を求めない点でもロッシェニの様式を理解しているとは言いがたい。

DVD② ジャン=ピエール・ボネル(演出・装置・衣装) ジェイムズ・レヴァイン指揮メトロポリタン歌劇場管弦楽団&合唱団
マリリン・ホーン(Ms) ダグラス・アルステッド(T) パオロ・モンタルソロ(B) アラン・モンク(Br)他 (収録:1986年1月ニューヨーク[ライブ])Deutsche Grammophon(海外盤)



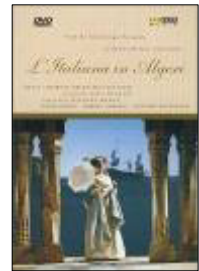
新時代の幕開け(③と④)

メトロポリタン歌劇場の映像の翌年(1987年)に収録されたのが、シュヴェツィンゲン音楽祭がチューリヒ歌劇場を招いて実現した上演の映像である(③)。ミハエル・ハンペ演出の舞台は背後にアルジェの空と海を見渡す宮殿の回廊で、シーンごとにアレンジされるものの、舞台の作りは一貫している。その構図は常套的でも、ハンペならではのセンスが光り、写実的。衣装も全員それらしいデザインで、色彩も美しい。沈没した巨大船の船首が背後を横切った後に登場するイザベッラとタッデーオの衣装から、このオペラが初演された 19 世紀初頭に時代を移したことが判る。

ラルフ・ヴァイケルトの指揮はスピーディで生気に富む。イザベッラを歌うドリス・ゾッフェルはマーラー歌手としても活躍するドイツ人で、アジリタの切れが良く、聴き応えがある。リンドーロ役のロバート・ギャンビルは 90 年代後半に声質が変わってヘルデンテノーラになったが、この段階ではまだテノーレ・レッジェーロ。ムスタファ役のギュンター・フォン・カネンは歌にもたつきがあるけれど、声は重厚で存在感がある。アリアの末尾の処理に旧弊な用法を残すものの全体の水準はこの時代にあって高く、ハンペの舞台も模範的といえる。しかし、この作品に備わる奇想と現代感覚を考えれば、《後宮からの誘拐》や《コジ・ファン・トゥッテ》に転用可能

な舞台は優等生的で、いささか物足りない。

DVD③ ミハエル・ハンベ(演出)ラルフ・ヴァイケルト指揮シュトゥットガルト放送交響楽団、ソフィア・ブルガリア男声合唱団 ドリス・ゾッフェル(Ms) ロバート・キャンビル(T) ギュンター・フォン・カネン(B) エンリク・セラ(Br)他〈収録:1987年シュヴェツィンゲン(ライブ)〉Arthaus(海外盤。日本語字幕付)



演出と歌唱の双方で新時代に突入した、と実感させてくれるのが、1998年パリ・オペラ座(ガルニエ宮)のライブ映像である(④)。アンドレイ・セルバンの演出は時代設定を自由に移し、背景にアラブの権力者らしき写真を掲げ、ムスタファもどこかリビアのカダフィ大佐を想起させる。宦官の身体はデブデブ、海賊たちは筋肉ムキムキにデフォルメされ、イザベッラ役のジェニファー・ラーモアは艶のあるロングコートでファッションモデル風。漫画的な発想と見せ方で笑いを喚起し、イザベッラとミニチュア船と一緒に登場させたかと思うと、舞台いっぱいの巨大船を沈没させてみせる。着ぐるみのゴリラはハンベ演出にも出てくるが、女の性の象徴に巨大なバラと乳房を掲げるのはなんともエロティックだ。ラーモアの表情と仕草も濃厚なエロティシズムを醸し出し、「女の武器」でムスタファを籠絡する演技もセクシーである。

リンドーロ役のブルース・フォード、ムスタファ役のシモーネ・アライモ、タッデーオ役のアレッサンドロ・コルベッリはロッシェニ・オペラ・フェスティヴァルで活躍し、卓越した歌唱技術を持つ。ラーモアも1994年に同フェスティヴァルのフォ演出でイザベッラを演じるなど、第一線のロッシェニ歌手がここで揃った。歌のヴァリエーションも的確かつ豊富で、声とその用法でもロッシェニ復興の成果を見事に反映させた舞台といえよう。



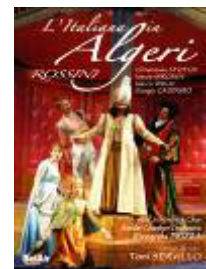
DVD④ アンドレイ・セルバン(演出)ブルーノ・カンパネッタ指揮パリ・オペラ座管弦楽団&合唱団 ジェニファー・ラーモア(Ms) ブルース・フォード(T) シモーネ・アライモ(B・Br) アレッサンドロ・コルベッリ(Br)他〈収録:1998年4月パリ・オペラ座(ライブ)〉Denon(国内盤。日本語字幕付)

21世紀の上演映像(⑤と⑥)

21世紀に入ってから2006年夏に一ヶ月違いで上演された⑤と⑥である。どちらもリンドーロをマキシム・ミロノフ、ムスタファをマルコ・ヴィンコが務め、歌手の大半が20歳代と、新世代のロッシェニ歌手にシフトしている。

エクサン・プロヴァンス音楽祭の上演(⑤)は野外で行われ、舞台には青い背景と床、中央に三層構造の簡素な塔があるだけ。舞台の広さと塔の小ささがアンバランスで、合唱団がいかにも窮屈そう。衣装は宦官たちが上半身裸、主要人物の衣装も簡素でセンスがいま一つ。トニー・セルヴィッロによる演出は歌手の配置と所作に終始して変化に乏しいけれど、余計な動きをしないぶん歌手の集中力が高まり、全員表情豊かに演じている。映像で観るかぎり、優れて室内演劇的な演出といえる(実際の舞台は実にチマチマして見えたに違いないが)。

イザベッラ役のクリスティアンネ・ストティンはオランダ人のバロック系歌手で、声の色は薄くても卓越したアジリタと正確な歌唱で大健闘し、「祖国のことを考えよ」も見事に歌いきる。他の歌手たちもフレッシュな歌声と確かな技術、生き活きとした表情と演技を繰り広げる。指揮者リッカルド・フリッツァの導く、鋭角的でスピード感あふれる音楽も爽快きわまりない。



DVD⑤ トニー・セルヴィッロ(演出)リッカルド・フリッツァ指揮マーラー室内管弦楽団、アルノルト・シェンベルク合唱団 クリスティアンネ・ストティン(Ms) マキシム・ミロノフ(T) マルコ・ヴィンコ(B) ジョルジョ・カオドゥーロ(Br)他〈収録:2006年7月エクサン・プロヴァンス(ライブ)〉BelAir(海外盤)

この上演の対極にあるのが、歌と音楽を犠牲にしてはばからないダリオ・フォの演出である(⑥)。こちらはロッシェニの音楽の奇想とシュルレアリスムを舞台に置き換えるもので、ラーモア主演の1994年ロッシェニ・オペラ・フェスティヴァルのために初制作され、同年ネーデルラント・オペラでも上演され大好評を得た。ちなみにフォは、その3年後、ノーベル文学賞を受賞している。

この上演の特質は、一にも二にも「音楽から受けたインスピレーションを視覚化した」と豪語するフォの演出にある。序曲では海で魚が跳ね、漁師がアクロバティックな動きをするかと思えば、水着の女性たちが新体操のように駆け踊る。その後も次から次に劇と無縁な着想を視覚に変換し、歌手が歌っている間も周囲で助演やダンサーが絶えず動いている。リンドーロは動物園の飼育係への置き換えなのか、着ぐるみのゴリラ、ラクダ、ライオン、キリン、ダチョウに囲まれてアリアを歌う。「祖国のことを考えよ」では、イタリアの自転車チームが現れ

る……すべてそんな調子なのだ。舞台に目を奪われるから耳に集中できず、歌と音楽が BGM と化す。ソリスト全員に揺れる台の上での歌唱を求めるなど、わざと歌いづらくしているのかと思えてしまう。「自分のやりたいことを、歌を犠牲にしてやっている」との批判が起こって当然だろう。

キャストはブルーノ・デ・シモーネを除く全員が当時 20 歳代で、イザベッラを歌うマリアンナ・ピッツォラートはその 2 年前にペーザロのタンクレーディ役で脚光を浴びたばかり。その後彼女が歌と演技の双方で大きな成長を遂げたことを考えれば、映像のそれはまだ固く、未熟で、ミロノフとヴィンコも舞台の騒がしさに集中力を欠き、歌唱は一ヶ月前に比して明らかに後退している。

DVD⑥ ダリオ・フォ(演出)ドナート・レンツェッティ指揮ボローニャ市立歌劇場管弦楽団、プラハ室内合唱団
マリアンナ・ピッツォラート(Ms) マキシム・ミロノフ(T) マルコ・ヴィンコ(B) ブルーノ・デ・シモーネ
(B-Br)他〈収録:2006年8月ペーザロ(ライブ)〉Dynamic(海外盤)



以上、六つの映像ソフトを紹介したが、②～⑥の映像は、僅か 20 年間に歌手、歌唱、音楽解釈、舞台演出のすべてに大きな変化が生じたことの証といえる。これは過去四半世紀にロッシーニ作品の上演と演奏が遂げた変貌の反映でもあるが、ここ数年の若い歌手への急速な移行は、一時的ではあれ演奏水準の低下を招いているようにも思える。それもあって、筆者の一番のお気に入りはいまなおパリ・オペラ座の映像である。充実した歌唱と演技、楽しさいっぱいのお洒落な演出は、何度観ても飽きることがない。